エリザベス•ブラックウェルにおける専門職と性差と身体生理
―19世紀半ばのアメリカにおける医学と女性―

荒木　純子

＜要旨＞

世界で初めての女性医師エリザベス・ブラックウェル（Elizabeth Blackwell, 1821-1910）は、人生の前半を過ごし学位を得たアメリカにおいても、生を受け、また後半生を送ったイギリスにおいても、女性が専門職としての医師へ進出する道を切り拓いた女性であった。そのきっかけは婦人科疾患に苦しみつつも男性医師にはかかりたくないと訴える女性患者のひと言であり、当時の男女間の慎みを重視する社会における女性医師の必要性を感じたブラックウェルは、その後医学における男性と対等な立場を求めていった。そのような姿勢を評価し、大西洋の両側で組織的になり拡大しつつあった女性の権利獲得運動に関わる人々はブラックウェルにも協力を要請するが、ブラックウェルはその運動には共感せず、むしろ女性の現状の責任の一端は女性自身にもあるという立場をとって断った。女性のあり方についてのブラックウェルのこの一見した矛盾はいかにおきるのか、ブラックウェルの人生の前半の時期を中心に、育った環境、アメリカの医学教育と女性の状況、そしてブラックウェルの考える身体生理、とくに身体の性差について彼女が創造した理論について検討する。

キーワード：エリザベス・ブラックウェル、性差、専門職、医学、身体生理
Keywords : Elizabeth Blackwell, gender, professionalism, medicine, physiology

はじめに

1821年にイギリスのブリストルで生まれたエリザベス・ブラックウェル（Elizabeth Blackwell, 1821-1910）は、1832年、家族とともにアメリカに移住し、1849年にニューヨーク州のジュニーヴァ医科大学（Geneva Medical College）を卒業した。当時のアメリカでは大半の州において医学の学位をとることは開業の免許を得ることと同じであった[1)]。従ってこれはアメリカで初めての「正式な」女性医師の誕生という大きなできごととなった。しかもこれは世界で初めてのことでもあった。

ここでの「正式な」という表現は、専門職であるという定義ができること、すなわち正規の専門教育に特化した高等教育を行う医学校を卒業したという定義による[2)]。というのも、たとえばブラックウェルよりもだいぶ前からボストンで医療行為に従事し、「アメリカ人女性医師の母」と呼ばれて活躍していたハリオット・ハント（Harriot Hunt, 1805-1875）という女性もいるからである[3)]。その頃は医学校を出ていない、いわば正式な

医師ではない者でも医療行為を行うことは可能であった。また、ブラックウェル自身も医学校への入学を許可される前から催眠を用いて治療し周囲の人から「ドクター・ブラックウェル」と呼ばれていたことを母宛の手紙に書き残している[4]。当時は徒弟制で学んだ医者も数多くいて、すでに医療行為に携わっていた者から技術を学ぶことにより、医療に参加することが可能であった。

しかしこのハントの例は同時に、その頃女性にとっては正式な医師になること、医学校に入学することがどれほど難しかったかをも示している。ハントはすでに名声を確立した医者ではあったが、ブラックウェルが1847年にジュニーヴァ医科大学に入学を許可されたニュースを知り、42歳の時にハーヴァード医学校に出願した。しかし女子学生の入学は「不適当である」と許可されず、その理由に納得できないハントが再度出願したところ、今度は在学生たちが強い拒絶感を示して抗議の議決を行った。そのような在学生たちの思いを尊重したハーヴァードの理事会は女性の入学を禁じ、1946年までその方針を変えることはなかった[5]。その代わりハントは後に医療現場における功績を認められ、1850年に設立されたペンシルヴァニア女子医科大学から名誉学位を与えられることになった[6]。ブラックウェルも最終的にジュニーヴァ医科大学に入学できたものの、やはり女性であるという理由で、その前にいくつもの医学校から入学を断られていた。その意味でもブラックウェルが最初の正式な女性医師となったことは、医学の歴史の中で画期的なできごとであったといえる。

それでは、ブラックウェルはなぜ医師になろうとしたのであろうか。専門職を得て男性と互角に勝負しようという彼女のそのような決意は、「家庭性の礼讃（cult of domesticity）」が当然の価値観として通用していたこの19世紀半ばにはたいへん新しいものであったはずである。そして、それを遂行するためには大きな勇気と覚悟が必要であったことは想像に難くなく、また周囲の人たちの理解を得ることはさらに困難であったと考えられる。

一方で、この19世紀半ばというのは、アメリカの女性たちにとって新たな時代の始まりを告げるときでもあった。それは、教会に熱心に通う女性信徒たちのネットワークから盛んになった奴隷制廃止運動とともに拡大していった女性の権利獲得運動の興隆である。1848年にニューヨーク州セネカフォールズにおける女性の権利集会において、スーザン・アンソニーとエリザベス・ケイディ・スタントンが独立宣言の有名な文言を読み替え「すべての男性と女性は平等に創造されている」という所信表明を行ったことはその一つの成果であった。

このような時代の流れとブラックウェルの医学への進出が全く無関係であったとは思えない。実際に、アメリカ社会史の流れの中に専門家としての女性医師を初めて位置付けた歴史研究者レジーナ・モランツ＝サンチェスは、1985年に著書『共感と科学――アメリカ医学における女性医師』で18世紀末から19世紀初めにかけての社会的経済的構造の大きな変化が家族や性差による役割の変化を生み出し、結果として女性が医師として受け入れら

れる素地を作ったことを議論した[7]。この研究は、偉業のわりには学問的な検討がまだ十分になされていないブラックウェルに光を当てた貴重な研究でもある[8]。サンチェスはそのような社会的経済的構造の変化の中で登場した女性医師ブラックウェルを道徳や精神的な面を重視した医者として捉え、科学者としての医師であるとはみなしてはいないが、「家庭性の礼讃」の時代、すなわち女性は私的空間にあるべきという時代に、ブラックウェルが公の場で活躍する機会を得た意義は圧倒的に大きかったといえよう。

しかしながらブラックウェルは大西洋の両側で発展していたこのような女性の権利獲得運動については冷やかな反応を示していた。彼女はそれを「反男性運動」とみなし賛同しなかった[9]。それどころか、そのようなある大会で講演するように頼まれたブラックウェルは、女性が置かれている立場の原因は女性たち自身にある、すなわち女性たちの多くは「不注意な母親、弱い妻、家事が下手、育児に対して無知、軽薄な人間」であるためだと断定し、女性たち自身が改善すれば自ずと道は拓けるだろうからという理由で断ったのだ[10]。この発言は依頼した人たちを驚かせ大いに傷つけた。このような傲慢ともいえる、恵まれた立場の視点に基づいた理屈はいかにして生まれてきたのであろうか。

その謎を解く鍵の一つは、ブラックウェルが苦労して医学の道に進み、医師として発展させた彼女なりの身体生理（physiology）に関する理論と関係していると考えられる。そこで本稿では、ブラックウェルの生涯をたどって彼女の恵まれた環境を可能にした特異な状況を明らかにしながら、彼女がたどり着いた身体生理の理論を彼女の人生の前半を中心に検討したい。

1．女性の社会進出と社会改革

女性の社会進出がまだ現実的ではなかった19世紀半ばのアメリカで、エリザベス・ブラックウェルが男性と対等な立場の医師を志したきっかけは、婦人科疾患に苦しむある女性からの一つの質問であった。

> あなたは勉強が好きで、健康で、時間もあります。それならどうして医学を勉強しないのですか。もし女性医師に診てもらうことができていたら、私の一番の苦痛はなくてすんだでしょうに。

このように言われたブラックウェルは、女性医師になろうという考えは達成不可能であると即座に否定し、さらに「私は身体に関わることすべてが嫌で、医学書をちらっと見ることすら耐えがたいのです」と付け加えた[11]。

19世紀に入り、植民地時代以来の伝統である産婆に男性産科医がとって代わろうとしていたが、上品さを重んじるヴィクトリア朝文化の中でこのような慎み深さは深刻な問題となった。産科医は婦人科疾患を抱える女性患者の視診を許されておらず、分娩介助の際にも女性の身体に触れるときには目を合わせてはいけなかった[12]。そのような男女間についての慎みはもちろんのこと、このブラックウェルの発言は、身体のことを口にするのは礼

儀に反するという、当時の良識をも反映している。

ブラックウェルの日記からは、彼女が慎み深さという心理的な障壁を乗り越えられたきっかけを読み取ることはできない一方で、当時の常識であった「家庭性の礼賛」に反するような、女性が職業を選ぶこと、専門職を持つことについての抵抗感も感じ取ることはできない。むしろ、その女性患者のことばを何度も嚙みしめながら女性が医師になる方法と可能性を探る過程において、意見を聞いた人々みんなの、良い考えでも実現不可能だという返答を聞くにつけ、医師になる決意を固めていったように読み取れる[13]。彼女のそのような意識、自らの立場の困難を乗り越えたいという思いを生んだ要因の一つは、おそらく彼女が育った特殊な環境にあると考えられる。そこで、まず彼女に影響を与えた人々との出会いについて論じる。

ブラックウェルに最も大きな影響を与えたのは、多くの文献も指摘しているように、まず間違いなく彼女の父サミュエルであろう。四男五女の三女として生まれたブラックウェルは活動的で、たとえば子どもの頃、望遠鏡で眺めるために屋根の上に登りたいと、姉と一緒に父に嘆願する手紙を書いた。女の子らしくないと反対する叔母たちに対し、父はユーモアたっぷりの韻文で禁止の返事を書いたことがあった。その主旨は落ちたら危険であるという理由であった[14]。性差によって言動を縛らないこのような父のおかげで、ブラックウェル家の5人の娘たちは病気がちだった次女のマリアンをのぞき、全員がたいへん珍しい独立心旺盛な一生を送っている。長女のアナはジャーナリスト、詩人、翻訳者という仕事で生計を立て、四女のエミリーは医師となってエリザベスと一緒に診療所を切り盛りした。五女のエレンはアーティストとなり、学校で美術を教えた。誰も結婚しなかったが、エリザベス、エミリー、エレンは養子を育てた[15]。

一方、エリザベスの男兄弟たちの方も独立心旺盛な女性たちと結婚した。長男のサミュエル・チャールズの結婚相手アントワネット・ルイーザ・ブラウンは、アメリカで初めての女性牧師である。次男のヘンリー・ブラウンの結婚相手は女性運動の担い手として名高いルーシー・ストーンで、彼らの娘アリス・ストーンもまた女性運動に関わったことで知られている。三男のハワードは若くして亡くなったが、四男のジョージはルーシー・ストーンの姪にあたるエマ・ローレンスと結婚した。エマ・ローレンスもまた地元で女性参政権の獲得に向けて活動していた人物であった[16]。

牧師も古くから存在する、男性のみの専門職であったが、女性初の牧師がブラックウェルとかかわりがあったというのは象徴的である。ブラウンはニューヨークに生まれ、中等教育後は当時の女性に唯一認められていた仕事である教師として働いていた。しかし牧師になりたいと考え、アメリカで初めて女子学生を受け入れたオバーリン大学を1847年に卒業した。そして神学校のオバーリン・セミナリーに進学したが、女性であるという理由から、男性であれば卒業と同時に得られる説教資格を得ることができなかった。そのためフレデリック・ダグラスの新聞『ノース・スター』に寄稿し、奴隷解放、禁酒、女性の権利についての演説をしていた。女性たちによる組織的社会改革運動の典型的指導者といえよ

う。そして1853年９月15日、ニューヨーク州サウスバトラーの会衆派教会で牧師に任命され、まもなく司式も執り行うようになり、アメリカ初の正式な牧師の誕生となった[17]。

このように、エリザベス・ブラックウェルの家族には自立した専門職の女性、女性の自立を訴える女性、そのような女性たちを支える男性たちがいた。ブラックウェル家はかなり特殊であっただろうが、女性医師、女性牧師の誕生がほぼ同時期であったことは興味深い。牧師、医師、弁護士は大学卒男性の専門職と考えられていた時代に、当時支配的であった「家庭性の礼讃」が少しずつ変容しつつあったことがうかがわれる。

そのほかにもブラックウェルが恵まれた興味深い環境や交友関係には驚かされる。これも父サミュエルの影響が大きい。ブリストルで製糖業を営んでいたサミュエルは改革論者であり、1831年に起きたブリストル暴動の際に町を焼き討ちから救った[18]。また非国教徒のインディペンデント派の教会に属しており、国教会に対して激しく抵抗した[19]。1807年の奴隷貿易禁止以前に三角貿易の拠点として栄えていたブリストルでは、奴隷を所有し続けたい商人に対抗して奴隷廃止運動が盛んであったが、奴隷解放を議会が制定する前からこの運動にサミュエルは加わっており、ブラックウェルもまたその雰囲気を感じ取っていた。彼女はブリストル暴動での焼き討ちで燃えさかる町の火を郊外の家から眺めたこと、そして奴隷制廃止論者として議会の指導者であったウィリアム・ウィルバーフォースを英雄視していたことを自伝に書き残している[20]。

サミュエルは改革論者として労働者に対して同情はしていたが、この暴動で彼らが暴徒化し、話し合いにならない状況に嫌気が差し、アメリカに渡ろうと決心したという[21]。こうしてブラックウェル一家は1832年、ニューヨークに移り住むが、そこで奴隷制廃止を唱え積極的に活動していたウィリアム・ロイド・ギャリソンと親しくなるのはごく自然な成り行きであったといえよう。ブラックウェルも姉たちと一緒に奴隷制廃止運動の会合に積極的に参加していた。ときには深夜のフェリーに乗って帰ることもあったが、恐れや困惑といった感情はなかったという。このように、ニューヨークの奴隷制廃止についての議論の最も激しい現場をブラックウェルは目のあたりにし、実際に参加もしていたのだった[22]。

サミュエルの仕事が思わしくなくなると1838年にシンシナティに家族で移住したが、サミュエルが突然死亡したため、ブラックウェルは17歳にして急に自立を迫られることになった。年長のアナ、マリアン、エリザベスと長男サミュエル・チャールズが家計を支えたが、その間この３人の姉妹で、女性の教育についての議論を行った会合に出席し、熱心に女性の教育の発展を訴えた。またこの頃、ブラックウェルは聖公会で堅信礼を受け、ホイッグ党を積極的に応援した。聖公会員でオハイオ州の元上院議員ウィリアム・ヘンリー・ハリソンがマーティン・ヴァン・ビューレンを敗って第９代大統領となったときには一緒に歌を歌い、たいへんな喜びを覚えたという[23]。1841年のことであった。このようにさまざまな社会的、政治的な活動にブラックウェルは積極的に参加していた。

これらの活動、とくにギャリソンを中心とする奴隷制廃止運動は会衆派の教会が大きな支えとなっていたこともあり、ブラックウェルは宗教的指導者とも直接かかわっていたと

いえる。またシンシナティには会衆派牧師のライマン・ビーチャーが初代校長をつとめるレーン神学校があったため、ブラックウェルは自然と当時の代表的知識人であるビーチャー家ともかかわるようになっていた。ヘンリ・ウォード・ビーチャー、キャサリン・ビーチャー、ハリエット・ビーチャー・ストウといった人々と知り合いになったが、女性医師になりたいとストウに相談したところ、個人的には素晴らしいと思うものの夫によると現実的ではないとのことだと反対され、がっかりしている[24]。もっとも彼ら、とくにキャサリンは、女性は家庭にあるべきであるという考えの持ち主であり、ブラックウェルとは相容れない面があったと思われるが、彼らとのかかわりが会衆派的な信仰心及び女性のあり方についての彼女の考え方に影響を及ぼしたことは間違いない。

さらにその頃、ニューイングランドで盛んになったトランセンデンタリズムがオハイオまで伝わってきた。シンシナティでの活動の中心にいたのは牧師ウィリアム・ヘンリー・チャニングであった。ブラックウェルはチャニングの説く教えの虜となり、カーライル、フーリエ、エマソンなどを熱心に読み、トランセンデンタリズムの大きな影響を受けることになった。このウィリアム・ヘンリー・チャニングはトランセンデンタリズムの祖であるウィリアム・エラリー・チャニングの兄の息子にあたる。エリザベスはすぐにチャニングの教会である、ユニテリアンの教会員となった[25]。ブラックウェルはビーチャー家だけでなく、チャニング家という、ニューイングランドを代表する別の知識人たちとも深く親交を持つことになったのだった。

このように、政治的にもまた宗教的にもブラックウェルは当時のアメリカ社会の指導的な考え方の人たちとの交流があった。そのため、家庭においてだけでなく社会からもリベラルなものの考え方を受け入れ、自分なりの考えを創っていく素地を与えられていたのではないかと考えられる[26]。

2．医学教育と女性

エリザベス・ブラックウェルはこのようなリベラルな考え方を許す環境に育ち、自分の進路も自分で選択した。そしてその決定に基づいて医師となる夢を実現化させるため、専門課程を持つ医学校に入学できるよう、行動に移すことになる。しかしながら、困難をもともと覚悟の上で敢えて医師になる道を選んではいたものの、実際に入学が決まるまでにはさらに大きな困難があった。その困難の理由には当時の女性のあるべき姿が反映されているが、ブラックウェルがいかにそれに対抗し、結果的に医師になるための入学を認められたかを見ていくことにより、女性と医学教育とのかかわりを次に検討したい。

ブラックウェルは医学校進学に必要なお金を蓄えるため、ノースキャロライナ州アッシュヴィルの学校での仕事に就くことにした。校長のジョン・ディクソン牧師が元医師であったので、空き時間に牧師宅にある医学書を読むというような医学校に行くための準備がそこでは許されていた[27]。しばらくしてその学校が閉鎖されると今度はサウスキャロラ

イナ州チャールストンに行き、ディクソン牧師の弟で、医学校の教授であったサミュエル宅に下宿することになった。サミュエルのおかげで教職を得て、また同時に毎朝彼からギリシア語などの医学に必要な勉強を教わった[28]。そしてそのかたわら、有名な医師に手紙を書いてはいろいろな医学校へ出願していたが、なかなか受け入れられなかった。ついにはフィラデルフィアまで行き直訴もしたが、全く受け入れられる気配はなかった。

ブラックウェルの入学を断る代表的な理由であったのが、女性は男性の助手だという考え方である。フィラデルフィアの高名なクェーカー教徒の医師ウォリントンに、ブラックウェルが医師になりたいという手紙を送ったところ、悩んだ末だというていねいな返事が来た。ウォリントンは、神が必要なときに女性医師を誕生させるであろうことは認めつつも、「女は男の協力者（helpmeet）として創られ」、「男が医師となり、女は看護婦になることが適切である」ことからわかるように、ブラックウェルの使命は、すべての能力を使い女性の一部を「病んでいる者の看病をし、見捨てられた者を救うという神聖な義務につかせること」であろうと書いていた[29]。

それでもウォリントンはブラックウェルを支援した。フィラデルフィアに来たブラックウェルに自分の患者を診せ、自分の講義に出ることを許可し、医学校への出願を手伝った。しかし、どのようにしても女性が医学校への入学を許可されることはないという雰囲気を感じ取ったウォリントンは、医師になりたければパリに行き男装して必要な知識を得ることだとすら口にする[30]。これらのウォリントンの発言からは、男性と女性の役割については境界線がはっきりとあって、それによって分離された領域内で、おのおのの役割を果たすべきであるという考え方がわかる。

ウォリントンが口にした男装をして医学校に行くというやり方は、実は現実的な解決方法であったと考えられる。イギリスのジェームズ・バリー（James Barry, 1795?–1865）という軍医は1813年にエディンバラ大学の医学校を卒業、イギリス陸軍で40年以上外科医として活躍した。フローレンス・ナイチンゲール（Florence Nightingale, 1820–1910）とともにクリミア戦争での救護活動にも携わり、ナイチンゲールとの諍いが記録されている。ところがバリーは死後に女性であったことがわかって大騒動となった[31]。ブラックウェルはナイチンゲールと一歳違いであり、つまり男装で医師になることはブラックウェルと同時代に実際にありうる話だったのだ。もちろんブラックウェルはこのことが明らかになる前に医師になっているため、ウォリントンの助言をどのようにうけとったかは不明だが、ブラックウェルは女性として医師になる夢を持ち続けた。これは女性として男性と対等に扱われたいという思いの表れだが、現実的に女性と男性が同じ場で活躍するのは不可能と思われた時代だったため、場を分けた上での平等、すなわちナイチンゲールのような看護分野の専門家となることを求めることしか女性に選択肢はなかったのであった。

またその一方で、女性医師の可能性に対して抱く困惑は、性差による役割に基づくだけでなく、教育や治療の現場における気まずさや違和感という側面もあったようである。というのも、フィラデルフィア医科大学の外科の教授であったパンクハースト医師は、女性

が医学的知識を持つことについては反対しないものの、授業中に女性の姿があったら困ると考えていた。そのためウォリントン医師と同様、ブラックウェルに男装を勧めた。クラスの数名にだけ男装の事実を知らせておき、変装がばれる危険が予測できるときには注意してもらいその場から逃れればいいという進言だった[32]。これにはこの時代の慎み深さとも関連し、医学について、身体について、男女同席で語ることについての居心地の悪さが表れている。

ブラックウェルの立場としても、自伝で直接的に不満を述べているところはないものの、授業中の下品な軽口についてたいへん不快な思いをしたであろうことは想像に難くない。後に、女性医師を目指していたニューヨークのサラ・ドリーにアドヴァイスを求められたブラックウェルは「もし卑猥なからかいやあざけりにあなたが耐えられるのであれば、成功を願い祝福を送ります」と答えている[33]。

しかし同時に、ブラックウェルが教室に入ることによって医学の場が洗練され、質が向上したであろうということも想像できる。たとえば、ジュニーヴァ医科大学入学後、当初、解剖学や婦人科学の授業では学生たちの居心地の悪さを考慮し、ブラックウェルが教室に入ることは許されていなかった。これに対してブラックウェルが抗議し改善を要求したところ、「ジュニーヴァにおける医学教育は高尚である」という判断で許可されるようになった[34]。

ブラックウェルと同級だった医師も、エリザベスとエミリーのブラックウェル姉妹を偲んで行われた会合において当時を回想している。ふだん下品に騒いでいる他の男子学生たちでもブラックウェルが登場すると授業中はだいたいおとなしくしていた。しかし生殖器官の解剖になると、ふだん男子学生に冗談をいいながら講義をしていた教師がまず居心地悪く感じ、ブラックウェルに席を外すように伝えた。するとブラックウェルは、医学を学びに来ていること、学費を払っていること、自分は他の学生と同様にその授業を受ける権利があること、もし帽子が邪魔であれば後ろの方に座りそれをとることを伝え、そして最後に「科学を真剣に追究している者、とくに人体というすばらしい構造を学んでいる者が、女性の服装をした学生がいるというだけで、なぜこの興味深い素材からそれほどまでに気をそらされることになるのかたいへん不思議」だと付け加えた。教師がこの返答に恥じて、それ以降、ブラックウェルはすべての授業に出られるようになったのだという[35]。

当時、どのような人が医師になったのかについてもこの同級生は語っている。ジュニーヴァ医科大学があったジュニーヴァという町はセネカフォールズのそば、フィンガーレイクスの一つのほとりにある、豊かな自然に恵まれたところであった。当然ハーヴァードのような大都市の伝統ある医学校とは違い、そこの学生はほとんどが農民、商人、機械工の息子であったが、他のどの仕事にも向いていない者が医師を志したというのである[36]。このような環境に突如、他の何よりも医学を志した真剣な女子学生が入ってくることが同級生としてどれほど面食らうことであったかは容易に想像がつく。その反面、ブラックウェルがその場に加わることによって、医学教育の場が洗練されたことは間違いなく、必然的

に質も向上したと考えられる。

しかしそもそもブラックウェルがジュニーヴァ医科大学に受け入れられた直接のきっかけは、このような学生たちの遊び心のおかげであった。フィラデルフィアで高名なウォリントン医師の推薦状付きで届いたブラックウェルの出願書類に、地方の小さな医学校であるジュニーヴァ医科大学の教授陣は頭を抱えた。というのも、女子学生を受け入れることは当然考えられなかったが、教授会が断ったという責任を負いたくなかったのである。同級生となる学生たちが嫌がったからという体裁を取ろうと、全会一致で受け入れに合意した場合以外はブラックウェルの入学を断るということで、自治会に決定を託したのだった。それを受けて学生たちは余興のつもりで大騒ぎしながら採決を行った。クラスの雰囲気は浮かれ騒ぎで、ひとり小声で反対した学生に対して他の学生たちが圧力をかけて撤回させ、全会一致で受け入れを決定したのである[37]。それは1847年のことであった。女性のための最初の医学校ボストン女子医科大学ができるのは1848年のことであり、またハリオット・ハントに名誉学位を与えたペンシルヴァニア女子医科大学も1850年に開学するので、時代は女性にも医学教育を認める方向に動きつつあったことは確かであるが、初の女子医学生はこのようなめぐりあわせで誕生したのだった。

このようにしてブラックウェルはジュニーヴァ医科大学になんとか入学することができ、そして1849年１月23日に首席で卒業した[38]。この達成にあたっては元医師のディクソン兄弟やウォリントン医師のような男性たちが、あまり積極的な形とはいえないこともあったにせよ、協力してくれたことが大きかった。ブラックウェルの「反男性運動」に賛同しかねるという姿勢にはこのことに対する恩義が重みを持っていたのは本人の弁にもある[39]。いずれにしても、世界初の女性医師の誕生というできごとは、ブラックウェルの強い意思とその意思を直接的にまた間接的に、応援するような男性たちのおかげであった。そして、女性が医学教育の場に入ることによって、医学教育の質が変わり、それはおそらく全体として向上する方向であっただろうことは想像に難くない。こうして男性のみの専門職であった医学の世界への門戸が女性にも開かれ、その後、ブラックウェルに憧れる女性たちが医学へと少しずつ進出していくことになった。

３．エリザベス・ブラックウェルの身体生理理論

晴れて正式な医師となった後もエリザベス・ブラックウェルの苦労は続いた。そもそもアメリカには医師として働ける場所がなかったのだった。そのときの思いは母への手紙に「私の行いの結果がいかに目に見えなくても、私の目的が正しく、私は人類の救済を自分なりのやり方で行っているのだという信念はますます強まってきています」と書きつづられている[40]。ブラックウェルはどのような目的を持ち、どのようなやり方で、人類の救済という大仕事をしようとしていたのだろうか。最後にその基盤となる、身体生理に関する彼女の理論を検討する。

卒業後、ブラックウェルの中にはさらに勉強したいという強い思いも生まれていた。そこでまず当時の医学で最先端であったパリに移り住んだ。いくつかの大学で講義を聞きながら臨床研修を受けられるところを探したが、ここでも女性であるという理由から病院や診療所にはなかなか受け入れてもらえなかった。唯一ブラックウェルが望む研修を受けられそうな場所はラ・マテルニテという産院であったが、フランスでは女性は助産婦としての訓練を受けさせるという方針であったため、ブラックウェルは学生として入学せざるを得なかった。ここで研修を続ける中、医師であるブラックウェルは当然のように頭角を現すが、施療中の事故により目の感染症にかかり片眼を失明してしまい、外科医及び産科医の夢を諦めることになった[41]。その後、ロンドンでの研修を希望し、聖バーソロミュー病院での研修生として受け入れを認められた。しかし今度は婦人科病棟だけは立ち入りを認められなかった。その病院の産婦人科学の医師は女性が医学を学ぶことには反対だという手紙をブラックウェルに送っているが、これはおそらくイギリスにおいても当時広く共有されている考え方だったと考えられる[42]。このようにしてブラックウェルはヨーロッパでの研修でいろいろな経験をつんだが、アメリカと同様に女性医師がなかなか受け容れられないことを知った。

しかしヨーロッパにおける研修の間には、後の仕事に大いに関わる出会いもあった。夫に先立たれたバイロン卿夫人と出会い、女性の権利や病院のあり方について語った[43]。また一生交流を続けることになるフローレンス・ナイチンゲールとも出会った。活躍していたナイチンゲールは当時、女性らしくない仕事をしているという非難をイギリスでさかんに受けていたが、ナイチンゲールの仕事を通じてブラックウェルは公衆衛生こそが医学にとって一番重要なことだという気づきを得た[44]。そして実際にブラックウェルはその後、とくに公衆衛生を保つための仕事により深く携わることになる。

公衆衛生への関心はまた、ブラックウェルがこのように学生・医師として専門職を目標に苦労しながら仕事をしていく中で男女の性差に基づいた彼女なりの身体生理理論に行き着いたことが大きいと考えられる。その端緒はまず、アメリカに帰国して約1年後の1852年に発表した、6回の講演をまとめた『生命の法則――とくに若い女性の身体教育に関して（*The Laws of Life：With Special Reference to the Physical Education of Young Girls*）』に見られる。この本は女性患者を引きつける目的で女性医師ならではの視点から、とくに若い女性に向け身体生理について語るために出版されたものだった[45]。この講演も本も評判がよかったとブラックウェル自身は自伝で語っているが、なかなか仕事はみつからず、ようやくその翌年になってニューヨーク市内の一角に自分の小さな診療所を開くことができた[46]。そしてこれをきっかけに、その後貧しい人たちや女性のための病院、女子医科大学を設立し、ようやくアメリカでの仕事の足場を作ることができた。

ブラックウェルの身体生理理論は、社会学研究者ケイト・クルッグによれば基本的に歴史研究者トマス・ラカーのいう「ワンセックスモデル」に基づいているという。すなわち、女性の身体は男性の身体の裏返しであり、両性の身体はもともと一つの型であるため

に原則同等だということである。古典的には体内の熱量の差によって生殖器が体外に押し出せるかどうかが決まり、熱量が多くそれが可能な男性身体が優れていて、女性の身体は劣っているとみなされていた。ところがブラックウェルの場合、むしろ女性の身体こそが標準であり、男女の身体の差は単に生殖に関わる相補的な機能の差に過ぎないと考え、その理論を男女の平等性を打ち出す方向に展開させたのである[47]。

このように理論を展開することにより、ブラックウェルにとってはセクシュアリティが重要な意味を持ってくることになる。当時、発見されて間もないエネルギー保存の法則により、女性は出産のためにより多くの熱量が消費されるため、知的活動には少しの熱量しかまわせないと通常解釈されていたが、その身体生理理論をブラックウェルは読み替えて、思春期の未完成の身体で性エネルギーを使うと身体的もしくは知的に劣った子孫が生まれるという方向に発展させたのだった[48]。そのために若い女性に対して正しい性教育を訴えたいと思い、若者に節制を促すような本『生命の法則』を出版するに至ったのである。

このような男女の関係とセクシュアリティについてのブラックウェルの考えには、おそらく彼女の医学生時代の現場体験も影響しているに違いない。ブラックウェルは医学校での夏休みにフィラデルフィアの救貧院での仕事を得たが、そのとき女性梅毒患者病棟の担当となった。そして若い未婚の女性たちばかりがひどく苦しんでいるのを目の当たりにし、男女がいかに自己中心的な関係を結んでいるかに心を痛めている。さらにその後1869年、社会にはびこる婚姻外の男女関係の醜さを実感したのだという[49]。この1869年のできごとというのは、ブラックウェルがイギリスに永住するために帰国した直後のことで、伝染病予防法（Contagious Diseases Acts）を3度目に制定する会議を指している。この男性委員のみの会議の資料を手渡されたブラックウェルは内容を読んで衝撃を受けた。というのも、この伝染病予防法の実態は性病の予防であったが、その際男性側の責任は一切問わずに娼婦を一掃するものであり、男女の性のあり方に対するダブルスタンダードが如実に表れたものであった。ブラックウェルはこのことを道徳（moral）に関わる重大なこととみなし、このように男性が娼婦を買うことができることこそが「種の進化の最大の障壁」となっていると断定したのだった[50]。ブラックウェルは、道徳は公正であるべきと書いており[51]、これはダブルスタンダードの解消を意図していると考えられる。

ここでブラックウェルのいう「種の進化」という表現が唐突に響くかもしれないが、ブラックウェルが展開した理論の根底には、実は進化論を人種の違いの説明に適用した当時流行の考え方がある。骨相学の理論に従い、身体には精神が表れると考えられていたため、知性や気質に関する性差や人種の違いというものは顔の垂直度、頭部の長さと幅の比率、脳の大きさや重さ、形態、頭骨の容量などによって計測可能であるという考え方が一般的であった[52]。従って、「生命の法則」を犯して年若いうちに性交を持ち、度重なる妊娠・出産を経た結果は必然的に、非白人に多く見られるような貧困や社会的弱者という状態に表れうるという考えにつながるのだった。その一方でブラックウェルは、その法則を

犯す歯止めとなりうる道徳は人間の能力の一つであるとも考えていたため、著書において若者に道徳、すなわち性規範を教育しようとしたのだった[53]。

ブラックウェルが女性の権利獲得運動に関連する大会での講演を断ったときの理由を思い出せば、女性が弱い立場にあるのは女性自身に非があることもあるということだったが、つまりこのような「生命の法則」を犯した場合の当然の帰結としての社会的な抑圧は自分で背負うべきだということである。そもそも女性は自分でそれらの法則を犯さないようにすべきであるため、一律に女性に権利を与えるべきかどうかという問題ではないという考え方である。救貧院における体験、そしてとりわけ伝染病予防法制定のときに男女の性規範におけるダブルスタンダードに憤りつつも、社会的に弱い立場に置かれてどうすることもできない女性たちに対してブラックウェルは権利という救いの手をさしのべる必要はないと考えていたようである。そしてこれこそが、「生命の法則」を導くことになった「科学」的な考えに基づく、当時最新の身体生理理論であったのだ。

さらに、ブラックウェルが女性の権利獲得運動に賛成しかねた理由には男性に援助してもらった経験以外にもう一つの側面があった。それは「教育の偉大な目的というものは女性の権利とか男性の権利とかといったものとは全く関係なく、人の魂と身体の発達に関係する」という彼女の考え方だった[54]。このことばで魂と身体とが並列されていることは重要で、ブラックウェルは実際に道徳の発達と身体の発達を重視した身体生理理論を展開している。一方、ここでの「人」が指し示しているものは、男女の両性が含まれてはいるものの、彼女の考え方からすれば、人種や社会階級の違いをも包括したものではない。自分で身体と魂を律することができる立場にある、社会的に余裕のある、恵まれた環境の人々と理解するのがいいのだろう。つまり、ブラックウェルの身体生理理論は、性差に優劣をつけず同等であると主張した点においてはリベラルな主張であったが、人種の違いや階級差によって引き起こされる社会的抑圧をそのまま是認するような当時の「科学」的理論に基づく保守的な思想は保持していたのであった。そのため、包括的な女性の権利獲得をブラックウェルは認めることができず、その点で、彼女の性差についての見方には大きな限界があったといえる。

おわりに

このようにして、エリザベス・ブラックウェルは、19世紀に入り急激に科学と医学が発達しそれに伴う職業の専門化の波で女性が最新の現場から排斥されていく過程で、女性として初めての医師となった。彼女の活動はたいへん進歩的で積極的であり、基本的にはリベラルな考えの持ち主ではあったが、彼女が医師として展開した身体生理理論は、同時代の保守的な社会思想の枠組みを超えてはいなかった。それは、当時の社会思想そのものが、いろいろな「科学」的発見が相次いだ時代の、急激に発達する「科学」という名の下で展開されており、科学というものがあたかもばら色の未来を約束するかのような響きを

持っていたことに一因があると考えられる。彼女は後半生の著作においても身体生理という科学的響きを持ったことばを多用し、人種の優劣、そして社会の優劣についてまでも述べている[55]。

しかし生来リベラルな考えで、基本的には男女の平等を信じているブラックウェルはほんとうに「科学」の名の下に展開された差別的な思想に絡め取られていたのだろうか。ブラックウェルが、教育の目的は人の魂と身体の発達のためであるといったとき、その魂ということばには、道徳という面だけでなくキリスト教の規範も込められていると考えられる。というのも、非国教徒インディペンデント派の家に生まれ、聖公会で堅信し、ユニテリアン、ローマ・カトリック教会、スウェーデンボルグ教会とさまざまな教派を渡り歩いてはいるが、ブラックウェルは基本的に熱心なキリスト教徒であったからである。たとえばこのようなキリスト教的信条は女性のあり方、専門職への進出、身体生理理論についての彼女の考え方にいかに影響しているのだろうか。それになによりも後半生のイギリスにおけるブラックウェルの活躍の検討など、議論すべき点は挙げるだけでもたいへんだが、それらは次の課題としたい。

注

1) ジョン・ダフィー（網野豊訳）『アメリカ医学の歴史――ヒポクラテスから医科学へ』二瓶社、2002[1993]、339頁。
2) ダフィー『アメリカ医学の歴史』、39頁。この「正規の」や「専門職」という定義は判断が難しく議論になりうるが、ここでは歴史的には逆に見て、現在私たちが医師と認める人物の定義と同等であるという形で見なすことにする。
3) Ruth J. Abram, "Will There Be a Monument?: Six Pioneer Women Doctors Tell Their Own Stories" in *"Send Us a Lady Physician": Women Doctors in America, 1835-1920* (New York and London: W. W. Norton, 1985), 71.
4) Elizabeth Blackwell, *Pioneer Work in Opening the Medical Profession to Women* [1895], with an Introduction by Amy Sue Bix (New York: Humanity Books, 2005), 86. なお、催眠による治療と正規医学との関連も興味深いが、その議論は別の機会に譲る。
5) Abram, "Will There Be a Monument?," 71-73.
6) Abram, "Will There Be a Monument?," 81.
7) Regina Morantz-Sanchez, *Sympathy and Science: Women Physicians in American Medicine*, with a New Preface by Morantz-Sanchez (Chapel Hill: University of North Carolina Press, 2000 [1985]).
8) 日本語で読むことができるブラックウェルに関する文献は伝記が中心で、それらの内容同士には齟齬も見られる。緒方房子「エリザベス・ブラックウェル――医師への道を切り開いた女性」『帝塚山大学教養学部紀要』50輯（1997年）、8-24頁；レイチェル・ベイカー（大原武夫・大原一枝訳）『世界最初の女性医師――エリザベス・ブラックウェルの一生』日本女医会、2002年。また一般書だが、猿谷要『アメリカを揺り動かしたレディたち』NTT 出版、2004年でも紹介されている。英語圏では女性偉人として児童文学の題材に多く扱われている他、博士論文をもとにした伝記２本を始め、イギリスで出版された伝記１

点とでいくつか文献はあるが、既存の学問分野に組み入れる形での言及は多いとは言えない。Nancy Ann Sahli, *Elizabeth Blackwell, M. D.: A Biography* (New York: Arno Press, 1982) [Ph.D. diss., University of Pennsylvania, 1974]; Margo E. Horn, *Family Ties: The Blackwells, A Study in the Dynamics of Family Life in Nineteenth Century America* (Ph. D. diss., Tufts University, 1980); Julia Boyd, *The Excellent Doctor Blackwell: The Life of the First Woman Physician* (Stroud, Gloucestershire：Sutton Publishing, 2005).

9) Blackwell, *Pioneer Work*, 208.
10) Margaret Foster, *Significant Sisters: The Grassroots of Active Feminism, 1839-1939* (New York: Alfred A. Knopf, 1984), 59-60.
11) Blackwell, *Pioneer Work*, 74.
12) ダフィー『アメリカ医学の歴史』、337頁。
13) Blackwell, *Pioneer Work*, 75-77.
14) Blackwell, *Pioneer Work*, 52-53.
15) Horn, "Family Ties," 32.
16) Horn, "Family Ties," 34.
17) Ann Braude, *Sisters and Saints: Women and American Religion* (Oxford: Oxford University Press, 2008), 98; Elizabeth Cazden, *Antoinette Brown Blackwell: A Biography* (New York：Feminist Press, 1983).
18) ベイカー『世界最初の女性医師』、24頁。
19) Blackwell, *Pioneer Work*, 53, 56-57.
20) Blackwell, *Pioneer Work*, 56.
21) ベイカー『世界最初の女性医師』、26頁。なお、ベイカーによるとその後サミュエルの製糖工場が火事にあったことがアメリカ渡航を決定づけたことになっているが、他の文献によると製糖工場の火事は、後に移住したニューヨークでの出来事になっている。また、火事についての言及はブラックウェル自身の自伝にはない。
22) Blackwell, *Pioneer Work*, 58.
23) Blackwell, *Pioneer Work*, 60.
24) Blackwell, *Pioneer Work*, 77.
25) Blackwell, *Pioneer Work*, 61-62. ウィリアム・ヘンリー・チャニングとエリザベス・ブラックウェルの関わりはこれだけではなかった。チャニングの叔父にはトランセンデンタリストのウィリアム・エラリー・チャニングの他に、ボストンの高名な産科医師ウォルター・チャニングがいる。そしてボストンにおける産科をめぐる状況にブラックウェルものちに医師としてかかわることになる。このブラックウェルとチャニング家、そして産科と女性とのかかわりはたいへん興味深く、別の機会にリサーチを進めることにしたい。
26) 本稿はブラックウェルと19世紀のアメリカ社会における宗教文化、とくにクェーカー教会と女性治療者についてのリサーチから始まったが、たいへん奥が深く大きな問題であることが判明し、時間と紙幅の制約上、だいぶ違う形のものとなった。今後もそのリサーチは続行するつもりである。
27) Blackwell, *Pioneer Work*, 81.
28) Blackwell, *Pioneer Work*, 91.
29) Blackwell, *Pioneer Work*, 94-96.

30) Blackwell, *Pioneer Work*, 104.
31) Rachel Holmes, *Scanty Particulars: The Scandalous Life and Astonishing Secret of Queen Victoria's Most Eminent Military Doctor* (New York: Random House, 2002). なお同書253頁において、バリーが両性具有者である可能性も指摘されているが、遺体を見たメイドは若い頃の子どもを生んだ痕があったと主張している。
32) Blackwell, *Pioneer Work*, 104.
33) Ellen S. More, *Restoring the Balance: Women Physicians and the Profession of Medicine, 1850–1995* (Cambridge and London: Harvard University Press, 1990), 9.
34) Blackwell, *Pioneer Work*, 113.
35) Stephen Smith, "A Woman Student in a Medical College" in *In Memory of Dr. Elizabeth Blackwell and Dr. Emily Blackwell* (New York: Women's Medical Association of New York City, 1911), 9–11.
36) Smith, "Woman Student," 3–4.
37) Smith, "Woman Student," 4–7.
38) Blackwell, *Pioneer Work*, 128; Smith, "Woman Student," 12.
39) Blackwell, *Pioneer Work*, 208.
40) Blackwell, *Pioneer Work*, 133.
41) Blackwell, *Pioneer Work*, 194.
42) Blackwell, *Pioneer Work*, 202–3.
43) Sahli, *Elizabeth Blackwell*, 89.
44) Blackwell, *Pioneer Work*, 205–6.
45) Kate Krug, "Women Ovulate, Men Spermate: Elizabeth Blackwell as a Feminist Physiologist," *Journal of the History of Sexuality* 7 (1): 51–72, n. 30.
46) Blackwell, *Pioneer Work*, 222, 224.
47) Krug, "Women Ovulate, Men Spermate," 52, n. 3.
48) Krug, "Women Ovulate, Men Spermate," 60–61.
49) Blackwell, *Pioneer Work*, 118–20.
50) Blackwell, *Pioneer Work*, 266.
51) Blackwell, *Pioneer Work*, 267.
52) シンシア・イーグル・ラセット（上野直子訳）『女性を捏造した男たち――ヴィクトリア時代の性差の科学』工作舎、1994 [1989]、37–56頁。
53) Krug, "Women Ovulate, Men Spermate," 61–62.
54) Blackwell, *Pioneer Work*, 208.
55) Elizabeth Blackwell, *Counsel to Parents on the Moral Education of Their Children*, London, 1878. たとえば一例として、西洋と東洋を比較し、一夫一婦制キリスト教の結婚と一夫多妻制の異教徒の乱れた男女関係を対照させ、身体生理に鑑みて西洋が優れているという結論を出している。この本についても稿を改めて論じたい。